

異物誤飲事故予防における安全教育の効果

(分担研究：小児の事故と予防に関する研究)

研究協力者報告書

日本大学医学部小児科、板橋区医師会病院小児科、沼津市立病院小児科
大久保 修 泉 裕之 宇佐美 等

要約 小児の誤飲事故予防に対する、安全教育の効果について検討した。4か月時に誤飲事故予防に関する教育を行い、1歳6か月健診の際に、異物誤飲に関する意識および事故の有無についてアンケートにより調査した。今回の予備調査では、教育を行っていないものとの有意差を認めなかった。今後、教育の方法、時期について再検討し、事故防止につとめる必要があると考える。

見出し語 小児の事故、異物誤飲、事故予防、安全教育

研究方法 誤飲についての意識と実際に誤飲の経験があるかを、アンケートにより調査した。アンケートは、例えば、「床から高さ1m以内は乳幼児の手が届く要注意範囲です。タバコ、薬、針、ビーズ、硬貨などを置かないようにしていますか?」のように啓発もねらった形式にした。

このアンケートを、1歳6か月時にいくつかの保健所および医療機関で施行した。4か月時に事故予防のための教育を行った群(A群)と、それ以外(B群)について検討した。

A群では、4か月健診の際に、実際に誤飲の可能性のあるものを見せながら、保護者(主に母親)に対して、誤飲防止のための話をした。

結果 目標は、それぞれ500例程度を考えているが、今回はA群が48例、B群が39例であった。年齢は、A群で1.51±0.03歳、B群は1.52±0.07歳で、差はなかった。男女比はそれぞれ26:22、17:22であった。

次にこどもが小さなもので遊ぶことがあるかについては、A群で48人中30人(63%)、B群で39人中31(80%)人が、ハイと答えた。床から1m以内に、タバコ、薬などを置かないようにしているかに対しては、A群で48人中43人(90%)、B群で39人中38人(97%)が、置かないようにしていると答えた。不要になった薬などをすぐに捨てるようにしているかについては、A群で回答のあった47人中42人(89%)、B群で39人中33人(85%)が、ハイと答えた。ピーナツなどの豆類を与えないようにしているのは、A群で48人中36人(75%)、B群で39人中27人(69%)であった。殺虫剤、医薬品などを、こどもの手の届かないところへ保存しているのは、A群48人中41人(23%)、B群で39人中37人(95%)であった。家族がタバコを吸うのは、A群48人中36人

(75%)、B群で39人中26人(67%)であった。

次に実際に、誤飲を経験したかという問いに対してA群48人中11人(23%)、B群で39人中5人(13%)が、誤飲の経験があると答えている。同胞に誤飲の経験のあるものは、A群の内、同胞のある27人中6人(22%)、B群で16人中3人(19%)が、経験していた。特に、A群の中には、1歳6か月までの間に、誤飲を3回繰り返している例もあった。また、同胞が既に、誤飲を経験した後に、誤飲したものが3例みられた。B群の中では、本人と、同胞が誤飲を経験したものは1例であった。

考察 小児の死亡率の第1位は不慮の事故であり、事故予防が重要な課題である^{1),2)}。そのなかで異物誤飲は頻度の高い事故であり³⁾、事故予防が必要であり、更に効果の評価に相当であると考えられる。

今回の結果では、誤飲に対しての全ての設問で、A群、B群の間に統計学的有意差はなかった。

実際に、誤飲の既往をみると、むしろ教育のあった群の方が、高率にみられていた。

まだ、集計は1回分しかでておらず、今回の結果で、判断することはできないと思うが、このような結果がでた理由として考えられるのは、今回たまたま、偏りがあった可能性、地域的な特色が存在する可能性、教育の時期などが適切でなかった可能性などが考えられる。今後、更に検討を加え、教育の時期および方法が適切であるかを検討する必要がある。

文献 1. 田中哲郎：子どもの事故の現場と対策の必要性、小児科臨床49:915-925、1996

2. 大久保 修：小児の交通事故とその予防、小児科診療59:1661-1616、1996

3. 木下博子、藤本 保、小児の誤飲事故の実体とその予防、小児科診療59:1588-1593、1996



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 小児の誤飲事故予防に対する、安全教育の効果について検討した.4 か月時に誤飲事故予防に関する教育を行い、1歳6か月健診の際に、異物誤飲に関する意識および事故の有無についてアンケートにより調査した.今回の予備調査では、教育を行っていないものとの有意差を認めなかった.今後、教育の方法、時期について再検討し、事故防止につとめる必要があると考える.